ほうきさん

2014年 6月

椋本673　存仁寺

深い悲しみ
苦しみを
通してのみ
見えてくる
世界がある
「平野恵子」

―退任に際しての消息―

本日、平成二十六年六月五日をもって、私は本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門主を退任し、後を本願寺嗣法・新門に託すことにいたしました。昭和五十二年四月一日、法統を継承して以来、三十七年二か月になります。至らぬことが多々あった中、今日まで務めることができましたのは、仏祖のご加護は申すまでもなく、宗門内外の方々のご支援、ご理解とご協力のお蔭であります。皆様に、心より感謝申し上げます。この間、本願寺では、阿弥陀堂の修復、顕如上人四百回忌、蓮如上人五百回忌、御影堂の修復、親鸞聖人七五〇回大遠忌法要等のご縁を皆様とともにすることができました。さらに、北境内地を取得できたお蔭で、活動をより広く展開できるようになりました。また、宗門では基幹運動の推進とともに、さまざまの活動や事業がありました。世界各地にも、お念仏の輪が広がっています。それらを、巡教などによって身近に知り、御同朋の思いを確かめることができましたこと、まことに有難く思います。この三十七年間は、勝如前門主の戦争を挟んだ激変の五十年に比べれば、やや穏やかとも言える時代でしたが、国内では大小の天災・人災が相次ぎ、経済価値が優先された結果、心の問題も深刻化しました。世界では、武力紛争、経済格差、気候変動、核物質の拡散など、深刻なあるいは人類の生存にかかわる課題が露わになりました。その中で、心残りは、浄土真宗に生きる私たちが十分に力を発揮できたとは言えないことです。私たちの宗門は、門信徒一人ひとりに、み教えが受け継がれるという素晴らしい伝統をもっています。これからも、社会の変動の中にあって、浄土真宗のみ教えや伝統にある様々な可能性を見つけ出し、各人、各世代それぞれの個性と条件を活かし、特に若い世代の感性と実行力を尊重して、一人でも多くの方を朋とし、御同朋の社会を目ざして歩むことができるよう願っております。後を継ぎます新門主は、築地本願寺で五年九か月の間、副住職を務めて経験を積み、見聞を広めています。今後は、法統を護るとともに、宗門全体を思い、広く宗教界を視野に入れて、務めることとなります。皆様の一層のご支援をお願いいたします。なお、私は、七十歳まであと一年余りとなりました。先のことは予測できませんが、阿弥陀如来の揺るぎない本願力の中に、宗祖聖人のみ教えを仰ぎ、浄土真宗の僧侶としての務めを、できる限り果たしたいと思っております。

平成二十六年
二〇一四年　六月五日

龍谷門主　釋即如ご門主　御消息

「ご消息」とはお手紙のこと。浄土真宗では、様々なご縁に際して、歴代の宗主が、そのおこころを広く伝えるために出される書簡をいう

6月の行事

1日(日)　6時30分　おあさじ
　　8時　まきかり出合い
4日(水)　19時30分　コーラス
15日(日)　13時30分　蓮如忌法要
16日(月)　6時30分　おあさじ

7月の行事

1日(火)　6時30分　おあさじ
2日(水)　19時30分　コーラス
16日(水)　6時30分　おあさじ
17日(木)　無量寿会一日研修　湯ラックス

夏の法座《蓮如忌法要》　6月15日(日)　午後1時30分　おつとめ「奉讃蓮如上人作法」

住職　蓮如上人御絵伝絵解き　　松阪善覚寺さん劇団「しゅりはんどく」
　　による蓮如さん物語・踊り・コーラスなど

善覚寺 法話劇団『しゅりはんどく』
《平成２３年結成。翌年当寺での親鸞聖人７５０回大遠忌法要のアトラクションとして寸劇をしました。全員が善覚寺の門徒で、まったくの素人集団ですが、浄土真宗の教えがわかりやすく理解して頂けるように楽しいお芝居を心がけています。　今回の存仁寺さまでのご法縁は蓮如忌ということですので、蓮如上人の御文章を中心としたお芝居をします。》善覚寺ご住職談　　皆さん是非にご参拝ください

教区・鈴鹿組関連

6月　1日(日)　東海教区門徒総代会総会・研修会
6月　8日(日)　東海教区仏教壮年会連盟総会・研修会
6月　30日(月)　東海教区仏教婦人会・寺院女性
　　総会・研修会
6月　23日(月)～ 25日(水)　鈴鹿組　親鸞聖人・
　　関東ご旧跡巡拝と福島復興支援　絆の旅

7月　2日(水)　東海教区布教団研修会（公開講座）
「大切な人を亡くすということ」

～グリーケアの現場で僧侶が見つめ続けた死別の悲嘆の物語から～
桑名組善西寺矢田俊量さん（理学博士）
7月　7日(月)～8日(火)　鈴鹿組仏教壮年会本山念仏奉仕団
7月31日(木)「御同朋の社会をめざす運動」東海教区研修会
「お寺の未来」～これからのお寺の100年を開く～
東京教区光明寺　松本紹圭さん（社団法人お寺の未来代表理事）

「深い悲しみ苦しみを通してのみ見えてくる世界がある」

今月のことばは、平野恵子さんの『子どもたちよありがとう』からです。彼女は、飛騨高山にある寺院の坊守でした。三十九歳の時、正月を迎えるために本堂の荘厳をしている最中に吐血しました。腎臓ガンだったのです。それから二年間の闘病生活の後、一九八九(平成元)年に往生されました。この本は、その二年間において、子どもたちを通して彼女が「人として育てられる尊さを知っていく」姿を手紙の形式で綴られたもので、三人の子どもたちへの遺言でもあります。今月の言葉の最後に、三人の子どもに対して「お母さんの子どもに生まれてくれて、ありがとう。本当に、本当にありがとう。あなた達のお蔭で母親になることができました。親であることの喜び、親のご恩の深さも知ることができました」と記しています。彼女自身、発病以前の子育ての間は不平不満で一杯で、鬼のような顔をして子どもたちを叱りつけてばかりいたんだろうと吐露しています。このような彼女が、ガンによる限られた時間の中で、今の自分に「できることは何だろう」と考えて、子どもたちと向き合う中で、多くのことを教えられ、気づかされていくことを、そのままメッセージとして綴っているのです。その言葉の一部を引用します。略…、こんな病気のお母さんが、あなた達にしてあげられること、それは、死の直前まで「お母さん」でいることです。元気でいられる間は、御飯を作り、洗濯をしてできるだけ普通の母親でいること、徐々に動けなくなったら、素直に、動けないからと頼むこと、そして、苦しい時は、ありのままに苦しむこと、それがお母さんに出来る精一杯のことなのです。そして、死は、たぶんそれがお母さんからあなた達への、最後の贈り物になるはずです。『子どもたちよ、ありがとう』

十八項　　二〇一四年法語カレンダー「心に響く言葉」より